# 学生担当者報 1

発行 / 天理教学生担当委員会　発行責任者 / 茶谷良佐　編集責任者 / 辻 雄二郎

Vol.395
立教182年
2019年
12月25日発行



TEL 0743-63-1511(内線5817), 直通：0743-63-2489　FAX 0743-62-5780
E-mail tsa@tenrikyo.or.jp　TSA Website https://tsa.tenrikyo.or.jp


## 立教百八十二年 学生担当者大会における表統領中田善亮先生ご挨拶 十一月二十五日・第二食堂

皆さま方には日ごろから学生層の育成の上に、ご尽力を頂戴しておりますことに、心からおねぎらいを申し上げるとともに、厚く御礼を申し上げたいと存じます。誠にご苦労さまでございます。また、ありがとうございます。

この九月に本部学生担当委員会が改選され、茶谷新委員長を頭（かしら）として心機一転して、新しい委員会がスタートいたしました。後ほど、委員長から挨拶があると思いますが、力が入り過ぎないかと少々心配をするほど、気合いが入っております。とは申せ、ここにお集まりの皆さま方のご協力無しに、成り立つものでもありません。まずはどうか、新しい委員会、お心寄せをいただきますようにお願いをいたしたいと存じます。

私自身のことなんですが、これまでお道の若い人を道の後継者として、もっとしっかりと育てる意識を高めて、具体的な取り組みをさらにさらに進める必要が





## お知らせ

### 一月例会

・期日　立教183年1月25日
・時間　15時30分受付　16時開始
・場所　教庁4階講堂

### 学生層育成者講習会 日程・会場案内

【教区】
・兵庫　1月30日13時～　教務支庁
・鳥取　1月30日13時30分～　教務支庁
【直属】
・此花　1月24日10時～　詰所

## 報告

### 十一月例会

去る11月25日、第二食堂に於いて「十一月例会」を開催。出席は41教区、147直属。

### 各地の動き

【直属学生層育成者講習会】
・名東　11月22日　大教会　120名　茶谷委員長出向
・岡　11月23日　大教会　200名　越智委員出向
・泉　11月23日　大教会　100名　柏原委員出向

### 人事

《立教182年11月25日付》
【直属学生担当委員長辞令交付】
・鈴木太一（東本・本鴨）
・藤原昭浩（社・神西）
・藤原淳太郎（神崎・宍粟）
・糸屋道久（中背・金龍）

### 業務記録

《立教182年11月16日～12月15日》
11月16日　まなびばチーム会議
18日　事務局連絡会
担当者報チーム会議
19日　学生連絡会
24日　研修会チーム会議
担当者活動部部会
25日　学生担当者大会
委員会
26日　編集部部会
27日　育成に役立つ研修会（～28日）
12月3日　担当者活動部部会
委員会
4日　編集部部会
5日　学修高校卒業生コース研究室会議
学修大学の部研究室会議
春の学生おぢばがえり
プロジェクトチーム会議
ビデオチーム会議
6日　人材育成部部会
学修部部会


web Happist
明日につながる学生WEBSITE
https://happist.net

あると、これは私が若い頃からずっと考えてまいりました。自分も若いのにそれを思ってきたのは、皆さんも同様に感じておられることだと思いますが、お道に若い人が少ない、育てられていない、そんな実感があったからであります。

もう一つは私自身が学生の頃に、いったんお道から距離を置こうというようなことを真剣に考えたこともありまして、そんなことで少し生意気な、斜に構えたような考え方を持っていた部分もあったと思います。

当時、年配の方が考えておられましたような、若い者には良い背中を示してさえいれば、つまり、親がしっかり通っていれば、一生懸命通っていれば、必ず素直についてくると。親神様がちゃんとお導きくださるというような。もちろんそれは大事なことなんです。しかしながら、私はそういったことを聞くにつれ、それだけでは子どもに信仰を促すには、現実的には到底あり得ないと考えていたんです。お道から離れていこうとする若い本人たちにすれば、物を言わない背中など見るはずがありません。そればかりか、自分は信仰の道を通ることを、親から直接一言も言われたこともないという理屈を与えているようなものだと、そんな考えを持っておりました。

若い人を道につなげるためには、若いが故に教えの知識はかじっているけれども、「信仰」というところまでは、じゃあどうなのかと、そういうことを考えなければならないと思います。信仰という、教祖の教えという、おぢばの温かみという、そういったにをいをかけようとするならば、もっと創意工夫と努力と真実がなければ、育たないんじゃないかと、そんなふうにも考えておりました。

当時の風潮と言いますか感覚的なものを振り返りますと、今はそういった意味では、かなりその部分での意識は高まってきたと思います。しかしながら結果を見るならば、まだまだ十分とは言えず、取り組みの創意工夫と努力と真実というものは、もっともっと我々の頑張りを積み重ねていく必要があると思っております。

そこで私はいつも自分自身、気を付けていることが一つあるんですけれども、それは何事も相手をよく見ること。そして、相手の身になって考えてみるということであります。これは一対一の場面においては当たり前のことで、それこそ言うまでもないことであります。ところが、





例えば今私は、ここにおられる大勢の皆さんにお話を聞いていただいているわけですけれども、私にとっての構図は、一対数百名の方々ということになるわけですけれども、皆さん方一人ひとりにとってみれば、そうは捉えないと思うんです。おそらく一対一の感覚で、私の話を聞いてくださっているのだと思います。つまり、一対一の構図が人数分だけ存在していると、こういうふうに考えるわけです。加えて、皆さんの中には私より年齢が上の方もおられるでしょうし、同級生もいれば後輩もいます。親子ほどの年の差の若い人もいます。そんな中で、皆さんの立場は同じ学生、担当者という立場で、ここに来ていただいているわけですけれども、じゃあそんなに幅広い層の方々を相手に話をするには、私は誰に向かって今日の話を考えれば良いのかと、どうしてもこう考えてしまいます。年配の方に対して話そうとするのか、親子ほどの若い人に話をしようとするのか、つまり話しかける層というか相手をイメージいたします。そして、皆さんお一人おひとりが、話のすべてでなくてもどこか一つでも話の中に引っ掛かりを感じてもらえれば、有り難いのかなと、そう思っていろいろ考えを巡らせます。

そうしてこの場に臨んで、皆さんにそんな思いで話し掛けることによって、一対数百というのではなくて、完全に一対一ということにはなりませんけれども、多少なりともそれに近づけたらと思います。

おそらく皆さん方も教会や地域へ帰れば、同様の場面をお持ちだと思います。ですから、そのあたりを参考にしていただければと思いますが、殊に若い人たち、とりわけ学生さんたちは非常に敏感ですから、我々の方がもし十把一からげのような話し方をすれば、あるいは通り一遍の表現での神様のお話だけを、とうとうと話して済ませるのならば、おそらく次回からは話は聞いてくれない。それどころか、もうその場には二度と来てくれないということにもなりかねない。ですから、やはりその一つひとつの場面を丁寧に、一人ひとりの顔を見て、そして目を見て、話し掛けるように思いを伝えさせていただかなければならない。そういった点を担当者の皆さんにはぜひお願いをいたしたいと思うわけです。

また以前もこの場で申したと思いますが、私が子どもの時に少年会の育成委員としてお世話になった方がおられま

すが、その人は私にとっては、何十年もたった今でも少年会の先生なんです。もう、おじいちゃんになっておられるおばあちゃんになっておられるけれども、私にとっては少年会の先生。学校の恩師も同じことですね。卒業して何年たとうが何十年たとうが、先生はいつまでも先生なんです。担当者の皆さんにとっては、学生担当という御用を任されている間だけの対象者であります。自分が三年間勤めるならば、その間に学生として入ってきて、卒業していく学生だけが直接の相手なんですけれども、しかし相手である学生本人にとっては生涯、皆さんは学担の先生なんです。その御縁を大切にして、一生付き合いの関係として、そういうふうに心して御用に当たっていただきたいということを改めてまたお願いをいたしたいと思います。

もう一点、これも学生さんに限らず、若い人のことですけれども、若い人の育成、学生も含めそういうことに携わる時に、年齢を重ねれば重ねるほど感じるのは年齢的なギャップであります。この年齢間に横たわるギャップというものは、埋めるわけにはいきません。埋めるのは不可能です。埋めようとすればするほど、笑われるだけですので仕方が無い。だから、ギャップがあることをお互いが認め合って、世代をつないだ一手一つの、お道の一手一つというものを考えられるように、考え方を大きくしていくことが大事だと思います。あなたが立派に育ってくれるということだけではなく、一緒に陽気ぐらしを創っていこうと、つまり世代の違い、開きはあっても親神様にとっては同じ子どもであるということであります。そのためには、やはりこちら側から理解をする努力をすること、そしてそのギャップを越えて先生として認められるような努力、工夫が先決であることは申すまでもありません。

これも一つ例えを挙げるならば、今私は五十七なんですけれども、親里で育ってきましたから教祖九十年祭から百年祭ごろの、東西礼拝場ふしんを含む、お道全体に本当に勢いがあった時代を知っております。私よりもっと年配の方であれば、八十年祭前後のもっともっと勇んでいたような勢いの姿もご存じかと思います。ところが、今の若い人たちは全教にそういった勢いがあったお道の姿は、全く知りません。この中にもそんな世代の方はおられると思います。今と、その当時の勢いとを比べるならば、何か勢いが





無くなったような今の姿しか知らないわけですね。話を聞くことはあるし、当時のことを映像で見ることはあっても、現状とその姿を結びつけることができないんです。若い人たちは、そんなことから我々以上に、道の行く末を案じている部分があります。案ずるのは私も同じです。道の将来を楽観しているわけではとてもありません。案じはいたしますけれども、おそらくその種類が違うわけですね。彼らは、お道全体が勇んでいた姿を知りませんから、つまり具体的な目指していく姿が分からない。もちろん、お道の歴史の中に先ほど申しました以前にも、戦前にも、またもっと昔にも幾つかの勇んだ時代がありましたけれども、それぞれの勇んでいた姿が必ずしも私たちの理想の姿というわけではありませんけれども。しかし、私にはある程度想像できる元気なお道の姿を、若い人たちは具体的にイメージすることができないんです。

その違い、つまり世代間のギャップの根底にある、時代背景とか、具体的な要因というものを、私たち年配の者はもっと理解しなければ、彼らの感覚を理解することはできない。つまりお互い理解ができない、近寄れないということになってしまいます。

それに加えて、年配の者は私も含め、その元気だった頃の姿を知っているので、今もどこかで「いや、神様におもたれしていれば大丈夫だ」と、「頑張っていればきっと大丈夫だ」と、「いつかまた以前のような活気にあふれた時代が来る」というような、若い人からすれば、とても楽観的とも思えるような感覚がどこかにあります。これが理解できないんです。

先ほど、若い人を育てるのに、物を言わない背中を見せるという話をしましたが、どこか似ているようなところがある気もいたします。学生担当者としても現在の学生さんたちの考え方、あるいは物の感じ方というものを、しっかり分析してアプローチすることは大切だし、取り組んでおられることかと思います。さらには、今申しましたようなことは単純に言えば立ち位置の違いですから、信仰的な部分だけではなく、しっかりとその背景にある時代、現代社会の現実というものを知り、学生さんですから学校の進学に関する考え方とか、就職の現実なども昔とは全く違っておりますから、それらもちゃんと承知をして対応していく

ことが、求められると思います。そして自分自身が若い頃に信仰に関して考えたこと。自分自身が若い時に大人たちの姿を見て思ったことを思い出すことも大切なことだと思います。

若い頃の自分はどんなだったでしょうか。教理も信仰も分からないことや疑問がたくさんありました。不足もしたし、怒られもしたし失敗もいたしました。その折々に声を掛けてくれた人もいたと思います。そして今の自分が育ちました。子どもの頃、学生の頃、青年の頃、まだ親が会長をしていた頃、その頃の世の中の風潮はどうだったでしょうか。自分が若い頃に、確たる信仰はあったんでしょうか。親や上級に反感や意見はなかったでしょうか。大人の姿に疑問はなかったでしょうか。若い人たちは今まさにそこに立っているんです。心を開いて、心をつないで、話を気持ちを聞いてあげることがやはり大事です。何が分からないのかということを、私たちは分かってあげなければならないのであります。

今日は、ちょっと細々としたことばかりをお話ししましたけれども、私たちは広く大きな視野で眺めるおおらかな部分と、細やかなところまで対応する繊細な部分との両面を常に持って、担当者一人ひとりがそれぞれの役割を自覚して、一手一つにお勤めいただきたいと存じます。

どうか皆さん自身が親神様、教祖をしっかり見つめて、まず自分が日々、成人を志す立場であるとともに、日々の御恩報じの実践を忘れずにお通りいただきたい。こうお願いしたいと存じます。

この道が、将来に向かって伸びていくように、そして世界に広がっていくことを楽しみにして、頂戴する与えていただく御用をしっかり勇んで勤めさせていただきたいと思います。

そんなことをここにいる皆さん方と共に、思いを共有しながら、学生さんたちをしっかりと育てさせていただきたいと思いますので、どうぞこれからもお力添えを賜りますようにお願いを申し上げまして、話を終えさせていただきます。どうぞよろしくお願いいたします。

（文責　茶谷良佐）





## 立教百八十二年　学生担当者大会における茶谷委員長挨拶　十一月二十五日・第二食堂

本日はお忙しい中、学生担当者大会にご参集くださいまして誠にありがとうございます。

先ほど、表統領先生より熱のこもったお話を頂戴いたしました。非常に心に染みるものがありました。改めて先生の下で学ばせていただけることに感謝しております。

今日は活動方針を発表いたしたいと思います。先ほど先生のお話を聞いて、改めて気付いたことがあります。現在、こうして自分自身がお道を前向きに通らせていただけるのも、考えてみれば親、また道の先輩たちのおかげだなということです。小さい頃から、親に「低い心で通りなさい」と耳にたこができるほど、何度も何度も言われ続けました。そのおかげで一応、常に低い姿勢を意識するようになりました。ところが、親からは不意に「あんた、頭高なってへんか？」と、時折私に注意をしてくれます。

この御用を受けてしばらくした時に、「あんた、最近頭高なってるで」と言われました。私は心を低くと意識しておりますので、「どこが高いねん」と言うと、「それが高いねん」と言うのです。なんともはめられた気分でありました。けれども、人様から見て本当に心低く通れているのか、これは分かりませんが、自分自身の中では何度も何度も私の癖性分を見据えた上で言ってくださったことが、大人になった今もずっと心に残っています。事有るごとにそういった姿勢で相手と向き合わせていただかなければいけない、また、立場が就くほどに、低い心が大切だと思います。また、おぢばがえりに関しても思うことですが、中学を卒業して以降というものの、おぢばの行事に参加のお誘いを頂く機会が増えたと思います。春の学生おぢばがえり、学生生徒修養会高校の部・大学の部、また、おせち・こどもおぢばがえりのひのきしん、男でしたので青年会ひのきしん隊であったり青年会総会など、よくよく考えてみたら、事あるたびに、回数で言いますと二ヶ月に一回のペースでおぢばがえりの行事に参加を促してくださる方々が居てくれていま

した。すべて参加はできませんでしたが、それでも声を掛けていただいたおかげでおぢばがえりの回数は、おそらく自分で行くよりもおぢばがえりをしたことになると思います。改めて思いますのは、そうして何度も何度も諦めずに注意をしてくれる人、そして声を掛け続けてくれた人のおかげで、今こういう立場をお与えいただいて、道の者として歩ませていただけているんだなということを感じます。私たち担当者としましては、若い人に先々につながってもらえるように、何度もその姿勢で取り組ませていただかなければならないと思います。

この十五期の活動方針でありますが「誠の心で人材の育成につとめよう」とさせていただきました。これは前期から引き続いての活動方針であります。目新しいことではありません。しかしながら、何度も声を掛け続けてくれた道の先輩たちのおかげで、今に時代がつながっているということがとても大切なことで、これから先もこのことは変わらない方法であります。声を掛け続けてくれた方々のその心は、ただ一つ、誠の心、教祖のたすけ一条の心だと思います。すべての人をたすけ上げたいという親心の元で声を掛け続けてけれたんだと思います。

そして、人材の育成につとめよう。「この道は人が人を育てる道ではない」と聞かせていただきます。親神様のご守護によって導いてくださる道であります。どうしたら導いてくださるのかというと、心を掛ける者の真実を受け取ってくださって導いてくださると信じます。そういうことで私たちはどこまでも、いつまでも、教祖のたすけ一条の誠の心で一人でも多くの学生さんに声を掛けて、おぢばにお引き寄せいただいて、成人の道をたどっていただけるように努めていきたいと思います。

誠の心でありますが、これはおかきさげにも順々とご神言がございます。私は誠の心ということで、足元からいろんな人を通して気付かせていただくことがあります。例えば本部の神殿当番をさせていただいている時に、同じ日の当番の先生と一緒に廻廊を歩いておりました。するとその先生が「こんにちは」「おかえりなさい」「ご苦労さま」と、道行くすべての人に声を掛けるのです。「先生、そんなに声を掛け続けられるって素晴らしいですね」と言うと、「教祖はご在世当時、帰ってくる人に『ご苦労さん』と声を掛けておられた。教祖に成り代わることはできないけれど、少しでも教祖を感じていただけたらと思う」と、そんなことをお話くだされました。なるほどなと思いました。

またある若者と一緒に街を歩いておりました時の話ですが、その彼が神社・寺・お地蔵さんの前を通るたびに深々と拝礼をしているんです。聞きますと、「教祖





が拝をして通れと仰った。それをさせていただいているだけです」と爽やかな笑顔で答えてくれました。素晴らしいことです。私は、なかなかそこまで実行に至らなかったです。またある人は救急車が通るたびに、ずっと「お願い」をします。なんとかあの方が成人にお導きいただきますように、ご守護いただきますようにと心の中で願っているみたいです。今朝も詰所から本部の朝づとめに徒歩で向かっておりましたら、ビニール袋の中にきれいに畳まれて入った膝掛けが道端に置いてありました。何か書いてあるんです。何が書いてあるんだろうと眺めますと、「落とし物です。落とし主に届きますように」と書かれてありました。

お道には、こういうような誠の心の人がたくさん居られるなと改めて感じます。昨今の現状を見たときに悲観する必要はないと思います。お互いがもっと誠の心を働かせていくことができたならば、その心について来ない者はないと信じます。誠の心を自分自身が、足元からもっと働かせていく場所があると思います。お互い常に教祖の心を呈して、少しずつ、一歩ずつと積み重ねていきたいと思います。

その上で、重点活動項目として二点挙げました。私たちようぼく、また、担当者としての務めはやはり、どこまで行っても布教の心だと思います。おぢばに人をお連れするということが私たちの使命であります。この使命を、今のお道の現状を見据えてお互いがどのように感じているのか。もっと一人でも多くの学生さんを増やしたいと、お互い思っているところだと感じます。学生生徒修養会・春の学生おぢばがえりは学生担当委員会の二つの柱でございます。今期はこの二つの柱に特に力を入れて、おぢばがえりの大切さを伝え、また、おぢばがえりへの声掛けをさせていただきたいと思います。

まず学生生徒修養会ですが、説明文を読みます。「『学生生徒修養会・学修プラス１・』今年は昨年以上に学修に力を入れていきたい。例えば、学生への受講呼び掛けを今までよりも『もう一工夫』してみる。あるいは、教会長や親への働きかけを普段よりも『もう一手間』増やしてみる。そうした一つ一つの『＋１』を積み重ねていくことによって、いつもより『＋１』の受講者のご守護を目指したい。もちろん、事後の丹精の上にも『＋１』を忘れないようにしていきたい。『学修プラス１』を合い言葉に誠の心で頑張りましょう」とさせていただきました。学修への呼び掛けは目新しいものでもありません。しかし私たちの例年の働きは、先ほどの表統領先生の話にもありましたように、相手をよく見る。また、相手に寄り添う、目を見て話すなどと、いつもより自分が向き合えなかった部分がまだあるかもしれません。そして昨年学修に一度参加の声を掛けて「参加は無理です」

と言われて諦めたこともあるかもしれません。そうした場合はもう一声掛けてみる。二度掛けたならば三度掛けてみる。電話でのお誘いだったならば、直接自宅まで足を運んでみる。いろんなところでお互いもう一工夫させてもらえることが必ずあると思います。これは聞いた話でありますが、ある直属で学生担当委員の御命を頂いた方が、なんとか学生さんを学修にお誘いしたい。でも教会には学生さんがいない。その人が取った行動は学校の付近でお誘いのチラシを配ったという事です。またある人はHappistがまだ冊子の頃に、コンビニの無料でチラシなどを置いてくれる場所に置いたならば、それを見た学生さんから教会に連絡があり、学修に参加したということも事実としてあります。考えてみると今まで取り組めなかったことはたくさんあります。そういった一工夫をしていきたいと思います。その上で教会長や親への働き掛けを普段よりもう一手間増やしてみる。やはり教会長さんや親の理解が無くては、なかなかおぢばにお連れすることが難しい時もあります。教会長さんに言いにくい、お願いしにくいこともあります。また、若輩者が目上の者に事改まってお願いすることは、勇気が要ることもあります。けれどもそういったところをもう一歩踏み込んで、教会長さんや親からも協力を得られるように心を運ばせていただきたいと思います。そういう一つ一つの積み重ねは、親神様が誠の心と受け止めてくださって、参加につながると思います。そして最後に最も大切なことは、事後の丹精の上にも、もう「プラス１」取り組んでいきたいと思います。参加した人たちは何かしら必ず感じてそれぞれのふるさとに帰ります。「学修どうやった?」と尋ねていただけたらと思います。もし毎回訪ねていると言う方は「一緒にご飯でも食べよう」など何かもう一つ事後の丹精の上に働き掛けをしていただければと思います。参加がかなわなかった人にも同じく、お誘いしてそれで終わりではなく、その後も引き続き声を掛け続けていただきたいと思います。そういった事後の働きが、丹精につながると信じております。「プラス１」を合い言葉にお互い誠の心で取り組んでいきましょう。

そして春の学生おぢばがえりでございます。「『春の学生おぢばがえり・春学どっと鼓舞・』学生の時から事あるごとにおぢばに帰らせてもらうことは、よぅぼくとして成人する上でとても重要なことである。先ずは私たち担当者が、道につながる学生はもちろんのこと、まだおぢばに帰ったことのない学生に対しても、おたすけ心を持って積極的に声を掛け、春学の参加者がどっと（大勢）増えるような御守護を目指したい。そして、春学は、学生自身が自らのおたすけ心を発揮して友達をおぢばへ誘える絶好の機会でもあるので、学生の自主的な取り組みをサポートしながら、学生のおたすけ心を『鼓舞』していきたい。『春学どっと鼓舞』を合い言葉に誠の心で頑張りましょう」とさせていただきました。この春の学生おぢばがえりは、基本的には学生が自主的に取り組んでいく行事となっております。担当者はそのサポートをさせてもらいます。しかしながらまず、おぢばにお誘いするというところから考えますと、私たちがその気持ちにならなければ学生さんも同じ気持ちで動いてくれませんので、どこまでも私たちは春学へのお誘いをしていきたいと思います。そしてこの春学は、学生がおぢばがえりを誘う、つまり、おたすけ心を養っていく行事であります。そういう行事であることを、学生と向き合っていく中に少しずつ彼らに伝えていって、彼ら自身から声を掛けておぢばに誘うように全面的にサポートしていきたいと思います。「鼓舞」とは勢い、勇気づけるという意味であります。その姿勢で春学にどっと、たくさん参加者が増えるように学生さんの心をサポートしながら、私たちも学生さんにどんどん声を掛けていきたいと思います。

「学修プラス１」「春学どっと鼓舞」この二つを合い言葉に、この一年取り組んでいきたいと思います。もちろんこれまでの各教区・直属での行事の「まなびば」または「教会につながるデー」など、これがその先にある学修、春の学生おぢばがえりへの参加へつなげることができる行事であると思いますので、そちらもこれまで以上に一生懸命取り組ませていただいて、最終的には学生生徒修養会・春の学生おぢばがえりに人をお誘いさせていただきましょう。

昨年、表統領先生がこの場において「学生との付き合いは一生の付き合い」という姿勢で取り組むことをお教えくださいました。一言の声掛けが必ず先につながります。また、私たちの姿勢が必ず彼らの目に留まります。その気持ちをお互い忘れずに、学生生徒修養会・春の学生おぢばがえりに、学生の間に一回でも多く、一日でも多くおぢばにお誘いすることを、高いところからではございますが、お願いをいたしまして、これからも学生担当委員会の活動の上に共々に勤めさせていただきたいと思います。本日はお忙しい中、お集まりいただきまして誠にありがとうございました。

令和2年度　天理教学生担当委員会

# 活　動　方　針

## 『誠の心で人材の育成につとめよう』

### 重点活動項目

### ・学生生徒修養会－学修プラス1－

今年は昨年以上に学修に力を入れていきたい。たとえば、学生への受講呼びかけを今までよりも「もう一工夫」してみる。あるいは、教会長や親への働きかけを普段よりも「もう一手間」増やしてみる。そうした一つ一つの「+1」を積み重ねていくことによって、いつもより「+1」の受講者のご守護を目指したい。もちろん、事後の丹精の上にも「+1」を忘れないようにしていきたい。

「学修プラス１」を合い言葉に誠の心で頑張りましょう。

### ・春の学生おぢばがえり－春学どっと鼓舞－

学生のときから事あるごとにおぢばに帰らせてもらうことは、ようぼくとして成人する上でとても重要なことである。先ずは私たち担当者が、道につながる学生はもちろんのこと、未だおぢばに帰ったことのない学生に対しても、おたすけ心を持って積極的に声をかけ、春学の参加者がどっと（大勢）増えるような御守護を目指したい。そして、春学は、学生自身が自らのおたすけ心を発揮して友だちをおぢばへ誘える絶好の機会でもあるので、学生の自主的な取り組みをサポートしながら、学生のおたすけ心を「鼓舞」していきたい。

「春学どっと鼓舞」を合い言葉に誠の心で頑張りましょう。





# 立教百八十二年　育成に役立つ研修会　開催報告

十一月二十七日から二十八日の二日間で、本部第七・八・九母屋を会場に「育成に役立つ研修会」を開催し、教区・直属・海外からの申し込みに加え、来春開催の「学生生徒修養会 高校卒業生コース」を初めて務める係員を含めた百六十一名の方が受講くださいました。

今年は、今までのプログラム体験コース、サポートコース、プログラミングコースに加え、新たに育成力ｕｐコースを設け、四つのコースに分かれて進められました。

**【コース説明＆コース受講者感想】**

**■プログラム体験コース内容**

プログラム体験コースでは、学生層育成行事で使用しているプログラムの有効性を体験するとともに、その心得を学ぶことをねらいとし、「プログラムについて」の講義を行いました。

**【プログラム体験コース受講者感想】**

・一人ひとりそれぞれの考え方を持っているからこそ、自分には考えのつかないような考えを知ることができ、視野を広げることができました。

・このプログラムは、学生に限らず効果的なんだと実感できました。

・他者を認めることの大切さを学びました。

**■サポートコース内容**

サポートコースでは、各種育成行事のプログラムに活用できるウォーミングアップやアイスブレイク、エクササイズの習得をねらいとし、ウォーミングアップやエクササイズの体験および解説に加え、「トレーナーの心得」についての講義を行いました。

**【サポートコース受講者感想】**

・学生にウォーミングアップやエクササイズを実践したくなりました。

・人や学生の心に耳を傾け、共に育つことを学びました。

・この研修会で学べることは天理教が持っている財産だと思います。

**■プログラミングコース内容**

プログラミングコースでは、各種育成行事の企画、立案、プログラム作成、運営について学び、行事開催の意識を高めることをねらいとし、プログラム作成の実習および解説に加え、「プログラミングについて」などの講義を行いました。

**【プログラミングコースの受講者感想】**

・もっと多くの人に受講してほしい。

・素直な学生には大人の心がストレートに写るので、真剣に向き合う大切さを改めて学びました。

・育成を主として企画をする場合、お道についてきちんと知っている上で、喜んでもらいたいという心を持たなければならないと思いました。

**■育成力ｕｐコース内容**

育成力ｕｐコースでは、現代の若者の特徴を学び、育成者としてどんなことができるかを自身で考えることをねらいとし、「現代の若者について」の講義や、コミュニケーションの実習を行いました。

**【育成力ｕｐコース受講者感想】**

・育成者としての自分を振り返り、今後どのように学生と接していけばいいか考える大変良い機会になりました。

・親であることの意識を持つことが、大事だと改めて感じました。

・教祖は育てる上で的確で簡単な言葉で教えられたことを思うと、教祖のお言葉を勉強して、日常に生かさなければならないと思いました。

# 第五十七期天理教学生会委員長選挙　結果報告

十一月二十三日、おやさとやかた南右第二棟を会場に第五十七期天理教学生会委員長選挙が行われ、運営委員三十名が出席し、傍聴者二十六名が訪れました。

はじめに、今回の立候補者である前川知子さん（天理大学二回生）が、所信表明において「第五十七期は、『家族とつながるあったかい学生会』を目指します。『家族』とは自分の家族はもちろんのこと、学生会の仲間も家族のように思っています。親神様にお喜びいただけるよう、陽気ぐらしを学生会の仲間と実践していきます。また、陽気な雰囲気を発信するために互いに手を取り合い、みんなの居場所になるような学生会を目指します。」と、第五十七期天理教学生会にかける思いを述べました。その後、運営委員による活発な質疑応答が行われ、学生たちは立候補者の答弁に真剣に耳を傾けました。投票の結果、前川さんが次期委員長として信任され、参加者一同は次期委員長を芯とし、来春から始まる第五十七期天理教学生会の一層の充実を誓いました。

NEWS&INFO

**学生生徒修養会 大学の部 PR記事**

連載　毎週月曜更新

・教理コーナー
**おやさまと若者**―現代（いま）を生きる君へ―　**上田 嘉世**（本部員）

・信仰エッセー
**明日の地図ひろげて**　**泉 裕一**（義立分教会長）

**渡部 芳文**（本理棟分教会長）

※内容は一部変更になる場合があります。





# 大学生の集い Work & Talk 開催報告

●関東ブロック

十月十九日から二十日にかけて東京教務支庁を会場に「関東ブロック大学生の集い Work & Talk 2019 in 東京」が開催され、五十五名の学生が参加しました。

今回は「喜び上手な人に」をテーマのもと四つのコースに分かれてプログラムが進められました。

まず始めに、参加者、スタッフ全員で二日間を無事に通れるように、お願いづとめを勤めさせていただき、各コースに分かれてグループタイムを行い、アイスブレイクを通して参加者の緊張をほぐしながらも、各コースそれぞれのテーマに沿ったお道の教えに触れるプログラムを行いました。

二日目には、全体プログラムとして、関東ブロックにつながる学担の委員長がそれぞれ登壇し、お道の教えに対するQ&Aの時間を設け、それぞれお道に対する思いや、意見を述べるなど、真剣に耳を傾けるとともに、向き合っていました。その後、各コースで二日間を振り返っての感想などを述べ合いました。

閉講式では、二日間の様子をまとめたふりかえり映像を上映した後、無事にお連れ通りいただけた気持ちを込めて、全員でお礼づとめを行い、東京教務支庁を後にしました。

●北陸ブロック

十一月九日から十日にかけて、富山教務支庁を会場に「北陸ブロック大学生の集い Work & Talk 2019 in 富山」が開催され五名の学生が参加しました。

初めは緊張していた学生も、ウォーミングアップやグループタイムとプログラムが進んでいくうちに打ち解け、和やかな雰囲気で楽しむことができました。

またグループタイムでは、学生同士の会話が弾み、貴重な意見交換の時間となり、さまざまな人の考え方に触れられる機会となりました。

また「一手一つ」や「互い立て合い、たすけあい」についての講話を聞いて、教理を深めるとともに、各教区学生会の動員に、活かす手助けとなる時間になりました。

最後に、二日間を振り返るとともに、各教区学生会同士の交流と、今後の活動内容や動員について話し合い、有意義な二日間を締めくくりました。

## 青　空

「『Happist』のWebコンテンツへの移行!!」なかなか衝撃的な発表だった。一九八七年九月に創刊され、学生層育成の必須アイテムとして親しまれ、活躍してきた小冊子『Happist』は、二〇一九年三月号をもって閉刊を余儀なくされた。時代の流れ、また教内の事情などその理由はさまざまであろうが、発展的かつ前向きに捉えなければならない事項だと思えた。

そんな時ふと思い出した一通の手紙があった。私も高校から大学時代学生会にはまり、本部勤務時代にも携わらせていただいた。その当時地元にいた弟からの手紙だ。長文で数枚にわたり自教会の事情や自身の現状など綴られており、最後に「長々となってしまった。しかし手紙には思い（重さ）があるから、受け取ってほしい」というような文で締めくくられていた。

スマホが当たり前でSNSでのやり取りが盛んにおこなわれる昨今、今一度「声は肥」だと教祖にお教えいただいたことを考えなければならないと思えた。やはり直接会って温かみのある優しい声を掛け続けることが、人を導き育てる大きな道具であると感じさせていただく。時には手紙を書いてその思いを伝えると効果的なのかもしれない。

熊本教区学生担当委員会前委員長　長瀬雅信